

胃リンパ腫の自然寛解

Spontaneous regression of gastric lymphoma: *Strauchen JA, Moran C, et al* (Cancer 60: 1872- 1875, 1987)

血液や他の悪性疾患が自然または非特異的治療の後に寛解を示すことは、まれではあるが、明らかに認められる現象である。悪性リンパ腫の自然寛解も認められるが、特に大細胞型あるいは組織球型の高度悪性リンパ腫では珍しいことである。

ここに提示した2症例は生検により組織学的に診断された大細胞型胃リンパ腫の自然寛解例で、寛解はシメチジンなどによる非特異的治療の後に認められ手術的に確認された。

〔症例1〕(73歳男性)の内視鏡所見は幽門洞部の肥厚した粘膜ひだを伴った大きな不整形潰瘍で、非医学

的理由のため14週手術が延期されたが、その間シメチジン900mgと制酸剤が毎日投与された。開腹時、潰瘍は残存していたが、その辺縁は平滑であった。リンパ節腫大や肝脾腫は認めなかった。胃部分切除と肝生検が行われたが組織学的にもリンパ腫細胞は認めなかった。

〔症例2〕(84歳男性)の内視鏡所見は幽門洞部の多発潰瘍を伴った結節状粘膜肥厚で、手術までの5週間シメチジン1,200mgまたはラニチジン300mgが毎日投与された。手術標本では小潰瘍を3個認めたが、同部位の組織像は粘膜萎縮を伴う線維化と成熟した小リンパ球の浸潤のみでリンパ腫細胞は認めなかった。

大細胞型胃リンパ腫は浸潤傾向の強い悪性腫瘍で通常は外科的切除や化学療法により治療される。今までに記録された自然寛解例は極めてま

れである。上述の2症例ではシメチジンなどによる非特異的治療の後に寛解が認められたことから、その機序として、 H_2 受容体拮抗剤の免疫制御や抗腫瘍作用との関連が示唆される。シメチジンは抗腫瘍剤ではないが、シメチジンによるヒトの気管支癌の寛解例が報告されている。またインターフェロン単独では反応を示さなかった転移性悪性黒色腫37例にシメチジンを併用したところ10例に効果が認められたとする報告もあり、免疫調節を介して抗腫瘍効果を表している可能性がある。これらの考えられるシメチジン効果の発現は切除前の治療期間がいつになく長かったことと関連があるのかも示れない。

(愛知県がんセンター消化器内科

種広健治 抄)